

2022年3月1日

2022年1月 Nr. 491

さて、今回は「高齢者の世話・介護」がテーマとして取り上げられています。

高齢になると人は、しばしば突然助けが必要になります。子供がいる人は、子供の助けを期待しますが、子供に助けてもらうことは多くの高齢者には気が重いですし、多くの子供にとってもまた、かつて両親が自分を世話してくれたように自分の高齢の両親の世話をするのは難しいです。そうするとしばしば衝突が起きます。身体的な世話・ケアには、そのために家に来て世話をしてくれる女性や男性の世話をしてくれる人もいます。しかしながら、多くの高齢者には1人で医者に行ったり、役所からの通知に返答したりすることも難しいです。そのような事のためには高齢者のための支援者 (Seniorenassistenten) がいます。介護等級 2 に認定されているほど介護が必要な人は、それに対して介護保険から年間に上限で1,612ユーロの給付を受けられます。

トゥルーマンさん (Frau Trumann) は、53才です。トゥルーマンさんが高齢者のための支援者になる前は、テニス場施設を経営していました。しかしながら、いつの頃からか夫の高齢の叔母の世話をしたり、ある高齢者施設へのその引越しの準備をしたりしなければならなくなりました。その時高齢者とかかわるそうした仕事に喜びを感じる事に気づいたことから、高齢者のための支援者の専門教育を受けるに至り、8年前に高齢者のための支援者として独立しました。トゥルーマンさんは現在、10人の高齢者の世話をしています。その中には彼女が毎週訪問する高齢者もいれば、また月に一度しか顔を合わせない高齢者もいます。トゥルーマンさんはこれを職業上行っているわけですが、そこからしばしば親密な個人的関係に発展したりしますし、トゥルーマンさんが友人のようなものになったりします。

ここ3年来トゥルーマンさんは毎週木曜日にある高齢女性のところに通っています。この女性は脊椎の手術以来もはやうまく歩けなくなり、それ以来車椅子生活となっています。彼女は72才ですが、5年前からブレーメン市の財団法人が保有する建物内の2部屋から成る住居に住んでいます。当該市財団の建物には高齢者向けに2部屋からなるものと、3部屋からなるものとで合計72個の住居があります。この女性は歩行だけでなく、黄斑変性症により読むことにも困難を伴っています。というのは、目がもはや正常に機能していないからです [不調だからです]。そこで手紙についてはトゥルーマンさんが代読したり、部分的にこの高齢女性に読んで聞かせたりしなければなりませんし、この女性の代わりに返事を

出す必要があります。

この高齢女性の娘にとっては、トゥルーマンさんがやってくれることが大きな負担軽減となっています。というのは、彼女は働いておりますし、面倒を見なければならぬ 2 人の娘がいるからです。娘が週に一度または二度この母親を訪ね、二人の娘（つまりこの高齢女性の孫）も連れて来ると、（トゥルーマンさんのおかげで）改めて処理すべきことが全くなく、お互いのために十分な時間が取れることを喜んでいます。トゥルーマンさんが自分の母親と du で呼び合うことは、娘には都合が良いです。トゥルーマンさんに母親の支援の頼み事に関して相談するのは大抵、娘です。なぜならば、本来は彼女自身でこれらをやりたいところですが、彼女にはそのための時間がないからです。

キュックさん (Frau Kück) は 51 才です。彼女はトゥルーマンさんが提供している支援をうまく利用できればありがたいと思っています。なぜならば、彼女自身には家庭があり、フルタイムで働いているからです。キュックさんは、母親が自分に対する期待が多過ぎると思っています。キュックさんは母親には日頃よく電話していますが、母親は、娘のキュックさんが滅多に電話をしてこないと思っています。しかも母親はそのことを言うのですが、娘だけがいるときだけでなく、他の人の面前でも言うのです。一方ではキュックさんは罪悪感を覚えますが、他方ではそのことで母親は彼女をイライラさせもします。

キュックさんの母親は 82 才です。彼女は、エレベーターのない建物に住居を構えています。しかも、一階ではありません。階段を登るのは彼女にはますます難儀になっています。なぜならば、太り過ぎ、高血圧、糖尿病、関節痛など多くの健康上の問題を抱えているからです。一度ちょっと心筋梗塞の経験もあります。そんな事情があるため、娘のキュックさんとしては、母親が高齢者施設に引っ越しをしてくれて、そこで支援を受けたほうがより望ましいと思っています。そうすることは、娘のキュックさんにとってだけでなく、母親本人にとっても大きな負担の軽減になるでしょうから。

キュックさんの母親は、彼女にふさわしいと思われるような住居を既にふたつ見学しました。しかしながら、ふたつのどちらの住居も彼女には気に入りませんでした。高齢者住宅において受けるような、他人の支援を受けることは、彼女には気が重く、つらいのです。キュックさんの母親は介護等級 2 であり、トゥルーマンさんが提案するような、自己負担ではない在宅の医療と支援を必要としました。しかしながら、キュックさんの母親はそれを望みません。キュックさんは一度ちょっと、母親のために近隣間の相互扶助を準備しようと試みたこともありましたが、誰かが自分のところにやって来たことは、とにかく母親には気に入りませんでした・・・。

さて、今回取り上げられている高齢者の世話・介護については、ドイツでは既に1995年に導入された介護保険制度に基づき実施されていると聞いていますが、日本においてもそのドイツの介護保険制度を参考にして2000年4月から施行されました（ただし、私の調べたところではドイツでは介護保険が適用されるのは高齢者に限定してはいないようです）。私も在職中は毎月の給与から介護保険料を控除されておりましたが、年金生活者である現在、保険料は年金から控除されています。いずれ将来は自分も利用する当事者になると思いますが、現在はまだ保険料の支払のみで関与しているに留まっており、具体的な介護保険制度のサービス内容に関しては殆ど知りません。従いまして、今回課題に登場する高齢者のカイさん（Frau Kai）及びキュックさん（Frau Kück）の母親共、介護等級2と認定されていますが、おぼろげながらの状態はBeiheftなどにより理解できますが、介護等級2が意味することを私は正確には理解できていません。

また、今回の放送・課題に取り組んだことを切っ掛けに高齢者の介護に従事する職業について調べたところ、日本では介護支援専門員（いわゆる「ケアマネージャー」）、社会福祉士、介護福祉士の3つの有資格者が該当するようです。その中で現場において医師の指導の下に医行為（例えば、喀痰吸引）を行う介護福祉士の役割はトゥルーマンさんにはないとのことですので、彼女がカバーしている業務領域は、日本の介護支援専門員および社会福祉士のそれぞれの業務の一部のようです。

ところで、今回の課題・放送において電話の頻度に対する娘のキュックさんと母親の感じ方の相違が印象に残りました。娘であるキュックさんは定期的に電話しているのですが、母親は滅多に電話をしないと感じています。Beiheftによれば、娘のキュックさんは実際には週に1回または複数回の頻度で電話をしていますが、電話を受ける側である母親のほうはそれでは少ないと感じています。電話の回数に対して娘と母親との間に考え方の差が大分ありそうです（その認識の違いだけでなく、母親がその不満を他の人の前でもこぼすことが問題を余計に大きくしているような気がしますが・・・）。娘のほうは1週間に一度または複数回電話しているとのことですので、母親としてはそれでは少ないとすれば、少なくとも1日置きまたはひよつとすると毎日でも電話が欲しいと思っっていると思われる。しかしながら、そこまでの頻度を求めるのは、家庭を持ち、フルタイムで働いている娘からすれば、過剰な期待ではないかと思えますし、客観的に見ても娘の主張のほうがより妥当性があるように感じます。ただ母親の気持ちも理解する必要があると思えますので、この問題の解決方法としては、一度キュックさんと母親で、場合によっては、トゥルーマンさんを交えて率直に話し合いをすることがよいのではないかと思います。何かを行う側とこれを受ける側の認識の差の問題は日常生活でよく見られることだと思います。放送からほぼ1年経過している現在、その後電話の頻度に関して両者間で問題は解決していることを期待したいものです。

今回の課題・放送でもうひとつ印象に残っているのは、トゥルーマンさんが、知人から自分の職業・役割についてどう表現するかと尋ねられると、いつも„bezahlte Tochter mit Fachwissen“（直訳しますと、「専門知識を有する有給の娘」でしょうか）と回答するとBeiheftに記載されていたことです。私はこの表現はうまい表現だと思いますし、なるほどと思いました。確かに支援を受ける高齢者にとっては、専門知識を備えているトゥルーマンさんは、親身になって接してくれる、非常に頼りになる「娘」のような存在だろうと想像しますので、トゥルーマンさんがそう思っているだけでなく、支援を受けている高齢者の皆さんの印象も代弁しているような気がします。

さて、超高齢化社会になっている日本においては、離れて生活する高齢の両親やひとり暮らしの高齢者の安心・安全を守る様々なサービスについては、複数の警備サービス会社、郵便局が提供しています。警備サービス会社は導線センサーや救急通報ボタンなどの機器を活用したり、郵便局は人的ネットワークを駆使したりしながらそれぞれが特長を生かしているようです（このようなサービスについての広告は新聞や雑誌でも最近よくみかけます）。また、また独自に安否確認サービスを提供している自治体も多いと聞きます。例えば、自治体と民間業者やボランティアと連携し、「配食サービス」は弁当などを宅配、「乳酸菌飲料配達サービス」は乳酸菌飲料を宅配する際に、受け取る高齢者の安否確認も行っているそうです。ドイツにも警備サービス会社は存在すると思いますが、日本と類似の上記サービスを提供しているのでしょうか。また、自治体での取り組みはどのようになっているのでしょうか。

K. K.

2022年4月29日

2022年3月 Nr. 493

今回は、不確実性 (die Unsicherheit) が話題になっています。

ボッシュ教授 (Frau Prof. Bosch) は、エアランゲン大学の社会学の員外教授です。同教授は、不確実性は動物においても脅威状態における感情として、つまり脅威に感じる場合の感情として存在するという見解です。しかしながら、周囲の世界に対する動物の反応は人間の場合におけるよりずっと定型的です。なぜならば、動物の反応は、同じ場合の人間の反応よりもずっと本能に基づくからです。決心がつかないこと、優柔不断なことの結果としての不確実性というのは、ボッシュ教授の見立てによれば、常に人間に付随するものであり、かつ人間を動物から区別する感情ということです。

確実性の気持ち、つまり安心感を人間は得ます。しかしながらそれは、人間が生きている文化を通じてです。なぜならば、人がある状況においてどのように反応するかという文化的な模範が存在することにより、可能性のある反応の多様性が制限されるからです。というのは、文化は人間たちに対し、他の人たちがすでに彼らの前にそのような状況において行った経験を伝えるからです。

定められた社会的な行動規範は、社会的に正しいものとして、かつ許容できるものとして見なされています。そして、社会的な制度・慣習により人が安心と感ずることが出来る空間のようなものが生じます。しかしながら、人の周囲の物や人間に対する確実性の気持、すなわち安心感を得る為には、常に未知なるものへの挑戦をしなければなりません。なぜならば、未来については何も分らないからです。すべてを慎重に検討し、かつ熟考しても、蓋然性を知ることにはしか役立ちませんし、不確実性が残ります。

経済的な安心感を得ることは、保険の契約を結ぶことにより可能です。例えば、ウンターフランケン (Unterfranken) のニーダーヴェルルン (Niederwerrn) という地方自治体、これはバイエルン州の小さな街ですが、このマルクスさん (Herr Markus) の保険代理店においてです。マルクスさんは30年来、保険代理人をしており、1,000人ほどの顧客を持っていますが、彼らのために、疾病保険や疾病追加保険から、権利保護保険や財産保険にいたるまで、あらゆる保険契約を行っています。自転車に保険をかけた人は、保険による給付金で新しい自転車を買うことができます。しかしながら、この給付金が保険契約者には確実にもらえるものであっても、自分の自転車が盗まれるかもしれないという不安は残ります。そしてもし盗まれた場合には自転車なして何らかの方法で自宅まで帰るこ

とを試みなければならないでしょう。

保険契約は、一般に人が頼りにできる給付の約束です。しかしながら、盗難にあった自転車を捜す時の手伝いまでは約束された給付には含まれていません。しかしながら権利保護保険は誰に対しても推奨できるものです。なぜならば、これをちょっと必要とするリスクが非常に小さいので、高いものではないからです。しかしながら、そのような場合に弁護士その他のために要するだけのそれほどの大金は大抵、持ちあわせていません。

マンガー博士 (Frau Dr. Manger) は、婦人科の医師をしています。彼女は自分の診療所をウンターフランケンに持っていますが、シュヴァインフルト (Schweinfurt) の西方 5 キロのところではなく、キッツィンゲン (Kitzingen) の南方 35 キロの場所です。マンガー博士は自分の職業をととても素晴らしいと思っています。そして不確実性との戦いは彼女には楽しくもあります。あるとき足の親指がむずがゆいということから、インターネットで原因はどこにあるのだろうかかと情報収集した一人の女性が博士のところに来て来るかもしれません。

すべての可能性のある原因をじっくり見る人は、もしかすると、命にかかわるようなことがそこにあることを発見するかもしれません。そのような心配を患者から取り除くことは彼女にはうれしいのです。しかしながら、そうすると待合室ではすでに次の女性患者が待っています。学者として彼女が知っているのは、常に本当の事だけを告げることができるわけではないということです。彼女は、ある患者に告げることが現時点だけでの知見であること、そしてそれはすぐに変わりうることも伝えなければなりません。しかしながら、彼女がこの不確実性について話してしまうと、女性患者たちはこれを聞きたくはありません。患者たちはマンガー博士の中に疑いのない権威のようなものを見たいと思っています。

健康において全く妥協などがあってはなりません。しかしながら、問題は、彼女が確信を持ちうるかどうかです。彼女の助けになるのは、自らの診療所の 25 年に亘る職業経験、同僚との交流それにさらなる研鑽です。それでも、少し不確実性が常に付きまといまいます。これは人間の生活にはつきものです。なぜならば、決定に際しては、決してすべての大枠の条件が知られているわけではないからです・・・。

さて、ボッシュ教授によると、脅威状態におかれた場合、動物と人間とでは反応の違いがあり、より本能に基づいて行動する動物の場合には、人間に比べより定型的だとのことです。この見解の意味するところを自分なりに具体的に考えてみたいと思います。例えば、怪しい人物に遭遇・対応したとき、例えば犬の場合、恐らく一般的には吠えるか、

かみつつかの対応を示すだろうと思います。これに対して人間の場合は、当該人物に話しかけるか、その場から逃げるか、警察に通報するか、周囲の人にも知らせるか、見て見ぬふりをするか、言葉や武器で威嚇したり、場合によっては応戦したりするなど、犬に比べるとずっと多くの対応が考えられそうです。人間の場合、本能よりもそれまでに積み重ねた学習や経験による影響が大きいいため、対応が定型的でなく多岐に亘るのではないかと思います。この理解が正しいかどうか分かりませんが、ボッシュ教授の見解について私はそう解釈をしました。

ところで、課題および放送に登場する保険代理店のマルクスさんは1,000人ほどの顧客を持っているということですが、わずか3名の社員をかかえた事務所にしては非常に多い顧客数を持っているという印象を最初は持ちました。放送によると番組の取材記者自身もマルクスさんの父親の仲介で保険に加入したとのことですので、マルクスさんは父親が経営していた保険代理店と父親の顧客を引き継いだことが窺われます。もちろんそれに加え、彼自身も30年来保険代理人として仕事をして来ていることを考えれば、1,000人ほどの顧客を持っているとしてもそれほど驚くことではないのかもしれませんが。顧客との日頃のコミュニケーションも円滑であるがゆえに従来からの顧客からの信用も厚く、彼らの維持も可能なのだと思いますし、更には30年来の長い経験により新規の顧客開拓についても成功しているのではないかと想像します。

K. K.

2022年6月3日

2022年4月 Nr. 494

さて、今回は経営協議会 (Betriebsrat) が話題となっています。

従業員は経営協議会と労働組合を作り、使用者・経営者は連盟を作ります。企業においては、そこでの従業員は少なくとも5人いれば経営協議会を作ることができます。また、全国的には一つ又は複数の産業部門において労働組合を結成することができます。例えば、ドイツでは金属加工という産業部門にはIG Metallがあります。これについては6月に496号において2021年12月17日の放送で少々聞くことができます。

人は労働組合という組織の仲間に加わりますが、会員としてその労働組合に対し会費を支払います。労働組合は経営者連盟に対し会員らの利益を代表・擁護します。しかしながら同時にこれにより、この産業部門のすべての被雇用者の利益をも代表します。ひとつの企業の労働者及び社員は労働協議会メンバーを選出します。それはその労働協議会が使用者・経営者に対し自分たちの利益を代表するためです。労働者及び社員はそれに対し会費を支払う必要はありません。

経営協議会はその業務に必要なお金を企業から得ます。これについてはそのようにドイツでは法律で定められています。そこにある考え・思想は、経営協議会の仕事・活動はそこで雇用されている人々の利益に応じており、それにより企業にとっても有益であるというものです。しかしながら、時折企業の経営陣は考えを異にしますし、自分たちは経営協議会により妨げられていると感じています。それにもかかわらず経営協議会のメンバーに対しては、彼らが経営協議会のために企業の業務から免除されている時間に対する給与を支払わなければならないといえます。その上、経営協議会のメンバーが専門家に相談したり、研修のためにセミナーに参加したりする場合、企業は彼らのためにその費用を支払わなければならないなりません。

この放送ではクルーゼさん (Herr Kruse) の名前で1人の経営協議会委員長が登場しますが、この委員長の選出については経営者が無効と見なしていました。クルーゼさんは2017年に選挙に立候補しました。なぜならば、当時の経営協議会は経営者に対し労働者の利益を十分精力的には代表してくれていなかったという考えを持っていたからでした。クルーゼさんは、選出されました。しかしながら、経営者は、クルーゼさんが裁判で権利を得る場合には、経営協議会がクルーゼさんから得たすべてのお金は返還を要求すると言って脅しました。その金額は月額1,200ユーロにもなり得ました。従って、クルーゼさんは、

裁判が進行中は、彼の経営協議会のために費やす時間の一部だけを対象に賃金を支払ってもらい、そして 3 年後に経営協議会が勝訴した時、残りの労働時間分に対して追加払いの賃金をもらいました。

1920 年の経営協議会法により企業における使用者・経営者の権力は制限されることになりましたが、経営協議会は大きな権力を持ちませんでした。経営協議会は人事計画について連絡を受ける必要がありますし、解雇通告および解雇について異議を唱えることができますし、新規採用および配置転換に対して同意することが必要です。しかしながら、労使関係の安定を守る必要があります。ストライキへの呼びかけは労働組合のみができますが、経営協議会はできません。使用者・経営者がしかしながら、経営協議会の仕事・活動を妨害した場合、1952 年の事業所組織法第 119 条により、1 年以下の禁固刑が科せられるおそれがあります。

経済上の決定は使用者・経営者の問題です。それにもかかわらず、経済的な問題について協同決定を望んだり、同僚の将来のために戦ったりする経営協議会もあります。シュヴァーベンにはケーニヒスブロン (Königsbronn) に製紙製造のための大型のシリンダーを製造する鋳物工場があります。その鋳物工場は全世界に輸出していました。その企業は常に経営のやりくりはうまくいったのですが、2018 年に倒産しました。なぜならば、バーデン・ヴュルテンベルク州が経営から手を引き、企業への出資を売却した後に、企業経営がますます悪化していったからです。この企業は経営協議会が救いました。しかしながら、大抵の企業においては、もはや経営協議会はありません。ドイツでは 90 年代半ばには経営協議会を有する企業で働く人はまだ 51% ありましたが、2020 年にはその数はわずか 40% しかいなくなりました・・・。

ところで、今回登場するケーニヒスブロン製のシリンダーを製造する鋳物工場は 650 年もの伝統を誇る企業でしたが、2018 年 12 月に倒産しました。しかしながらその後、経営協議会の協力の下、新しい形態の会社を設立し、若者を中心に解雇し、より高齢者を継続して働いてもらうなどで従業員の半数に減らし、再出発しました。その後顧客からの注文も増え、復活を果たしたとのこと。従業員たちは一部の給与を放棄したり、従業員たちが会社の持ち分の 33% を出資したりしたようです。また、旧会社を去った従業員の一部はその後新会社に再雇用されたそうです。その新会社の形態である Gesellschaft bürgerlichen Rechts (日本語では「民法上の組合」と訳され、2019 年の統計によれば、ドイツ全体では 20 万個以上この形態の会社が存在したとのこと) がどのようなものなのか、ドイツの会社の法律には全く疎い私には良くわかりませんが、2020 年にはその再生ぶりが認められ、Deutscher Betriebsräte-Preis (「ドイツ経営協議会賞」) の銀賞を受賞しました。今後も一定の利益を出し、会社としても末永く存続して欲しいと思い

ます。

さて、日本では戦後からの長い間、日本的労働慣行として、終身雇用、年功序列賃金、企業内労働組合の三つが特徴としてあげられてきました。90年代のバブル崩壊、非正規社員の増加などを経た現在では、これらの特徴も多く変化しているようです。しかしながら、企業内労働組合に関しては、組織率の低下が指摘されながらも一定の役割を果たしているようです。日本の企業別組合というのは、今回課題や放送に登場するドイツの経営協議会の役割と、日本とは異なるタイプの労働組合であるドイツの産業別労働組合の役割を併せて持っているような印象を受けました。というのは、日本の企業別労働組合の役割は、大雑把に表現しますと、会社の経営陣との賃金交渉だけでなく、人事に関する事項の承認という両方を対象としているからです。少なくとも私が在職していた会社ではそのように交渉が行われていました。まだ私が若き日に組合側の代表の一員として会社との団体交渉に初めて出席した時のことを思い出しました。会社の経営陣と労働組合幹部との交渉をただ見守るだけの役割に過ぎませんでした。とても緊張し、張り詰めた空気のなかで時間が経過したことを思い出しました。また、今回テーマになっている経営協議会については、私がかつて4年余り勤務した日本企業のドイツの現地法人にも存在しましたが、私は全く関与することなく過ごしたため、経営協議会と経営側との関係についてはどのようなものだったかについては知らないままに終わりました。

K. K.

2022年6月29日

2022年5月 Nr. 495

さて、今回は、現代ドイツのある隠遁生活者の生き様が話題になっています。

Nr. 495のA面に2019年12月30日の放送から抜粋された10分間の放送が収録され、ここではマリア・アンナ・レーネン (Maria Anna Leenen) さんという隠遁生活者の生き様が話題になっています。この放送は2021年4月28日(水)に再放送されました。

隠遁生活者として生きようとする人は誰でも、自分の好きなように生きることができます。隠遁生活者 (Eremiten) という名称・言葉はギリシャ語から来ています。ドイツ語ではその語は Einsiedler と言います。ドイツでは現在、カトリックから承認された90人ほどの隠遁生活者が暮しています。教会からの承認を受けるためには、当該隠遁生活者は、物理的にも心理的にも、つまり肉体的にも精神的にも、孤独のなかにあつて、瞑想的な祈りの生活を送り、祈りと冥想に集中することができることを担当司教に納得させる必要があります。祈りの時間は決まっていますが、祈りの時間については修道院におけると同じほどにはすべてを厳格に守る必要はありません。夜にも一度起きてお祈りをする人もいますが、たいていの人はそうはしていません。

人里離れた地域のどこかで隠者として居を定める隠遁生活者は4つの世界宗教すべてにおいて存在します。これが示していることは、この生活様式が宗教からではなく、人生に対する考え方から生まれているということです。キリスト教徒においては初期の隠遁生活者は3世紀、つまり1,800年も前に存在していました。神と近くにいるために、彼らは荒野に住まいを移しました。放送で触れているこの女性は、自身を女性隠遁生活者 (Eremitin) と称していますが、それは自分が男性ではないことを指摘したいと思うときです。それ以外には隠遁生活者 (Eremit) という男性名詞形を用いています。なぜならば、女性形は女性を表わすのに対し、男性形は性に関係なく、つまり男性、女性の性とは関わりなく両方の性を代表して用いられるからです。

それは当然、人間に対するすべての標記に当てはまりますが、多くの動物についても言えます。Kater (「雄猫」) という語は Katze (「一般に猫の総称でもあり、また雌猫を表わす語でもある」) の一部ですが、すべての Katze が Kater ではありません。ドイツでは女性市民 (Bürgerinnen) が男性市民 (männliche Bürger) より 2.1%多く住んでいます。しかしながら、Bürger という語は男女市民すべてを表わします。この女性隠遁生活者が自分は Eremit であると言うように、子供たちの中には、自分の母親について「私

の母は、(Ärztin という女性名詞を使わず) 医師 (Arzt) です」と言う子もいます。単数形においてはこの表現は目立ちます。

隠遁生活者の庵、しかしながら修道院の大きな僧房ではなく、全く隠遁した状態で、つまり単に 1 人で住むだけではないというのがこの女性の目標です。彼女は全く一人っきりでいることを望みました。そしてそれを彼女はすでに 30 年以来実践しています。隠遁生活者の庵は、赤煉瓦でできた小さな木骨家屋です。そこでは彼女は 2 匹の猫と 12 匹の山羊と一緒に暮しています。彼女は修道会には属していませんので、何らかの方法で少しはお金を稼がなければなりません。売るためのロウソクを作り、また本だけでなく雑誌や日刊新聞に、例えば飼っている山羊や隠遁生活についての記事を書いています。

レーネンさんは森から採取したベリー類やハーブ類を常食にしているわけではなく、近くのスーパーマーケットで果物や野菜を買います。買い物には自転車で行きますが、時には女友達の 1 人から車を借りる事もあります。

彼女はプロテスタントの洗礼を受けましたが、家族がクリスマスに教会に行ったのは、クリスマスの雰囲気を楽しむためでした。心臓疾患および循環器障害の運動療法士として、彼女はいくつかの病院で充分のお金を稼ぎ、素晴らしい旅行を行うことができました。28 歳のとき、ヴェネズエラは彼女の「夢の国」でした。そこは人口の 90%がカトリック教徒です。世界中を旅行したり、異国の文化を知るようになったりする代わりに、今や神を捜し求めます。彼女が礼拝に行くと、そこではカトリックのミサが行われています。そこではヴェネズエラの人々と一緒に情熱や生の歓喜を感じます。

レーネンさんが 2 年後にドイツにまた戻ったとき、カトリック信仰に改宗し、その直後に修道会に加入しました。修道院での時間は彼女にとって不安やもやもやした感情との向き合い方を学ぶ機会でした。しかしながら、修道会の隠遁生活者として生きることを望みませんでした。彼女は毎年、神への誓いを立てました。そして最終的には 2003 年に、永遠の誓いを立てました。彼女は、孤独の静謐の中で世間とは厳密に隔絶し、(貧困に、貞潔にそして従順に生きることを誓いました・・・。

さて、Eremitin であるマリア・アンナ・レーネンさんについては、Beiheft でも触れています。人が一般的に抱く隠遁生活者のイメージからはほど遠いようです。確かに課題や放送で彼女の生活ぶりを知れば知るほど、私もその点には全く納得できます。特に彼女が携帯電話を保有したり、友人から借りた車でスーパーマーケットに買い物に出かけたりすることも一般的な隠遁生活者のイメージとは一致しないでしょう。さらに調べてみますと、彼女がウェブサイトにもホームページを開設し、一般向けに発信していることを知り、

私には隠遁生活者というイメージからは考えられませんし、とても驚きました。そのホームページを閲覧したところ、彼女自身の来歴、今回のラジオ放送のみならず、ZDF で取り上げられたときの映像がありました（彼女がどのような風貌の人なのか確認することができました）。2017年の放送ではてきぱきと動いていますが、2019年の放送では歩くのに杖を使っていました。しかしながら、話すスピードは相変わらず早めで、歩行時とは異なり余り年齢を感じさせない印象を受けました。また、ホームページにはこれらに加え、彼女がこれまでに書いた20冊の著書などが紹介されています。隠遁生活者も時代の変化に合わせて変化していくということなののでしょうか。また、12匹飼っているという山羊ですが、私のイメージしていた一般的な白い山羊とは大分異なるもので、若干白色も混じっていますが、殆ど黒色や茶色がかった体型をしていながら、とても愛らしい様子をしています。改めて Beiheft を参照しますと、この山羊たちは afrikanische Zwergziege という北アフリカ西部原産の小型の山羊だそうです。日本語では「ピグミーゴート」と言うことが分りました。

ところで、ドイツには現在、90人ほどの隠遁生活者がいるとのことですが、彼ら・彼女らがどのような隠遁生活を送っているか興味が湧くところです。彼ら・彼女らが、マリア・アンナ・レーネンさんと同様に、ホームページを開設していることはないだろうとは思いますが、携帯電話を保有したり、スーパーマーケットに買い物に出かけたりなど現代的な生活を送っているのか、それとも昔ながらの隠遁生活者のイメージのままに自給自足に近い生活を送っているのでしょうか。

一方、日本での隠遁生活者の状況をインターネットで調べてみました。高校生の時に習った西行、鴨長明、吉田兼好などが隠遁生活者の事例として記載されています。そう言えば彼らは、僧侶、歌人または随筆家などでしたので、彼らの作品には隠遁生活者の様子が窺えたのを思い出します。しかしながら、現代の隠遁生活者となると、その事例としては私が調べた限り、よく分かりませんでした。やはり一部の宗教関係者が該当するのでしょうか。最近、かつて都会に住んでいた俳優や作家などの著名人が現在は田舎暮らしをしながらそれぞれの活動をしているのを時折見たり、聞いたりすることはありますが、彼らが隠遁生活者であると言えない気がします。

さて、隠遁生活者を表わす Eremit という単語については、私は今まで知りませんでしたので、改めて手元の複数の独和辞典および独独辞典で調べました。すると、Eremit の次にこの関連語らしき Eremitage が掲載されているのに目が留まりました。複数の独和辞典においてこの単語の語義としてふたつ記載されており、ひとつは今回の Eremit に関する「隠者の庵」ですが、もう一つは固有名詞の「エルミタージュ美術館」（サンクトペテルブルク市にあるロシアの国立美術館）です。そしてこの「エルミタージュ美術館」は、18世

紀半ばにエカテリーナ 2 世が購入した美術品を収蔵するエルミタージュ（フランス語で Hermitage「隠れ家」）と呼ばれる王宮別館だったことに由来する旨インターネットに記載がありました。今回これを知ることにより、一つの言葉が意外なところに繋がっていることを認識した次第です。

K. K.